【書　評】

築島裕著「平安時代語新論」について

大坪併治

築島裕博士の「平安時代語新論」が、昨夏、「東大人文科学叢書」の一冊として、東京大学出版会から刊行された。過去十数年間に、東大その他の大学で行はれた講義の草案を全面的に書き改めたもので、A五判、本文五九六頁、補説・訓点資料番号一覧・索引等七〇頁、計六六六頁。「平安時代の漢文訓読語につきての研究」（昭和三八年刊）「興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究」（昭和四〇年〜四二年刊）に次ぐ大著である。私は前者に続いて本書の書評を依頼され、一ケ月かゝつて一頁も余さず読み返し、改めて本書の価値を認識し、再び驚嘆せざるを得なかつた。

本書の意図は緒言に明かである。「前者は、和文語との対立といふ観点に立つて、漢文訓読の特性を揚言するのに急であり」、「後者は、この一資料に集中して、他の文献に言及する暇が殆ど得られなかつた」ため、「両者共に私の抱懐する平安時代語全体についての構想を十分に披瀝するに至らなかつた憾がある」が、「本書は、平安時代の国語全般に関して、私独自の構想によつて体系的に通観した通論である」といふ。

次に目次を追つて内容の紹介を試みるが、私の理解不足や紙幅の制限によつて、論述の趣旨を正しく伝へ得ないこともあらう。この点あらかじめ著者にも読者にもお詫びしておきたい。

第一篇　総論

第一章「序説」では、国語史における平安時代語の重要性を述べ、第二章「時代区分」では、平安時代四百年を初期・中期・後期・院政期の四期に分け、それぞれを草創期・形成期・完成期・持続期に当てた。第三章「平安時代の言語体系」では、平安時代の言語を、漢文訓読語が主流の漢文の世界と、日常会話語が主流の平仮名文の世界と、両者の中間的存在たる変体漢文・漢字片仮名交り文の世界との三系統に分け、その位相的対立に注目すべきことを論じた。

第二篇　資料篇

第一章「漢文の世界」、第一節「総説」では、漢文の世界の重要性、仏典・漢籍二領域の存在、宗派・博士家による点法・訓法の相違等を述べた。第二節「訓点の創始」、第三節「訓点の固定」では、中田博士に従つて、ヲコト点の系統を八種に分類し、初期には第一・二・三・四の群点があり、中期に入つて第一から第五が、第五

から第六が派生し、更に第七・八が意図的に作られたこと、ヲコト点は南都華厳宗関係の僧侶から起つて法相・三論系の学侶に及び、中期には俗家点も儒者や医博士に用ゐられ出したこと、また、時代が下るにつれて形式が安定し種類が減少し、これを用ゐる宗派・博士家との間に特殊な関係を生じたことなどを詳述した。第四節「仮名点本」では、ヲコト点の衰微に伴ふ仮名点本の出現を、第五節「訓点加点の用具」では角筆点について述べ、第六節「辞書と音義」では、平安時代に成立した音義・辞書を列挙して解説した。

第二章「平仮名文の世界」、第一節「総説」では、平仮名の文献を文書・消息類と和歌・日記・物語類とに大別し、第二節「平安時代書写の平仮名資料」では、信頼すべき平仮名資料を挙げて解説し、男子の手になるものの多いことを指摘した。第三節「和歌」では、和歌には和歌用語の体系があること、第四節「日記・随筆」では、日記は一般に純粋の和文であるが、土佐日記は例外的に訓読語を含むこと、第五節「物語」では、物語にも幾種類かの系統があり、漢文と関係の深いものは訓読語的語法を持つ和文脈となるが、純粋な和文でも特殊な表現効果を狙つて訓読語を交へることがあるなど、一様でないことを述べた。

第三章「変体漢文と漢字片仮名交り文の世界」、第一節「総説」では、変体漢文と漢字片仮名交り文とは、共に漢文から出て国語を表現するために書かれ、有識の男子によつて用ゐられたと見、第二節「変体漢文」では、変体漢文にも種々な形態があり、公卿の日記類が中心をなすことを述べ、第三節「漢字片仮名交り文」では、漢字片仮名交り文を訓点に発したものと宣命体に発したものとに分類し、更に前者に訓点本の注記と独立した文とを認め、後者は語序が国語のまゝで口誦性があるとした。

第三編　本　論

第一章「文字」、第一節「総説」省略、第二節「万葉仮名」では、平安時代に万葉仮名の用ゐられた種々の場合について説明し、第三節「草仮名」では、草仮名の名称を論じ、第四節「平仮名」では、平仮名発生の基盤に平仮名文の系列と訓点の系列とがあり、前者は正倉院仮名消息の系統を引き、後者は訓点資料に見えて記号的性格が強く、連綿草を用ゐず、仏書よりも漢籍に多く用ゐられたことを述べ、第五節「片仮名」では、訓点の世界では、時代が下るにつれて片仮名本位となり、一音一字になつたとし、仮名の字源に触れ、実字や重点に言及した。第六節「漢字・梵字」では、漢字の書体について述べ、終りに三十七表の仮名字体表を収めた。

第二章「音韻」、第一節「総説」では、九百年前後における国語音韻史上注目すべき事項として、特殊仮名遣のコ・ゴの区別の消失、各種音便とハ行転呼の発生、撥音便・促音便の発生による子音々節の増加、イ音便・ウ音便の発生による語中・語尾の母音々節の出現などを挙げ、また、位相による相違として、資料によつて漢字音・音便の使用に相違のあることを指摘した。第二節「国語音」では、平安時代に音節の数が73―70―69と次第に減少したこと、それには、コ・ゴの甲乙二類の区別の消失、ア・ヤ両行のエとオ・ヲの混同が原因であること、やがてイ・キ、エ・ヱも混同されるやうになつたこと、語中・語尾のΦ→Wの変化が一般化したこと、イ音便・ウ音便・撥音促・促音便が相ひついで発生したこと、撥音便には原則としてm・nの区別が保たれ、促音便と共に種々な表記法があつたこと、促音便は和文では用ゐなかつたことなどを述べ、更に、

子音の問題として、サ行頭子音、ジ・ヂとズ・ヅ、バ行とマ行、清音と濁音などを、母音の問題として、長母音・母音交代、語頭の撥音、ナ行とマ行との交代、有声子音と鼻母音、二重母音などを取り上げ、最後にアクセントに言及した。第三節「漢字音」では、平安時代が漢字音の体系を知り得る最古の時代であること、漢字音の種類に、訓点資料・訓注・音義・辞書等に存する漢字の音注で原音に近く忠実に表記されたものと、和文中の漢語や和名抄の注に見られる漢字音で原音を離れて国語化したものとがあること、国語音は変化したが、漢字音は殆ど変化しなかつたこと、漢音と呉音の二系統があり資料によつて使ひ分けられてゐることなどを述べ、撥音尾のmnŋ、入声尾のptk、開拗音・合拗音、止摂合転の韻尾、卦摂諸韻の韻尾等の表記法に及び、一音節語の母音の長呼、百姓読みに触れ、更に声調に六声と四声があり、これを示す声点の発生に伴つて濁音表記の始まつたことなどを述べた。

第三章「文法」、第一節「総説」では、訓点資料の参加によつて、初期の文法の不明な点が明かになり、上代文法の残存であることが分つたこと、中期以後の和歌・和文との比較によつて相互の文法の特性が分つたこと、鎌倉時代以後の擬古文に訓点資料の文法の見出される事情が分つたことなどを述べ、第二節「体言」では、代名詞と副詞を扱ひ、代名詞は和文と訓読文で多少の相違があり、陳述の副詞は殆どすべてが和文と訓読文で区別されてゐることを指摘した。第三節「用言」では、動詞・形容詞を扱つた。動詞では、「蹴」の活用について従来の説を批判し、上代からku-we, ku-we-ru, ku-we-reと活用する下一段活用があつた、または中期まではku-weで、後期に漢字音の影響でkweになつたなどが考へられること、動詞の活用別語数について、源氏と慈恩伝古点を比較すると、異なり語数で、共に四段活用が六割、下二段活用が二～三割を占め、この割合は資料の位相が異つても大きな揺れはないこと、動詞の個別的な活用の変遷がかなりの語に見られること、動詞の活用に現れる音便は、四段・ナ変・ラ変に限られ、和歌・和文と訓読語との間に相違があることなどを述べた。形容詞では、平安時代に入つて語彙が増加したこと、ク活・シク活で意味に相違があること、連用形は体言的性格を持ち、ズ・ム・バ・キ・ケリ・ツ・ヌなどに続かないので、その欠を補ふためにカリ活用が成立したこと、連体形がイ音便に、連用形がウ音便になる場合、キ・クを挟む前後の音に影響されること、和文と訓読文で音便の現れ方に相違のあることなどを述べ、ゴトシを形容詞に入れてその用法を論じた。第四節「接辞」では、接頭語と接尾語を扱ひ、接尾語の中に、受身・使役・尊敬の助動詞ル・ラル・ス・サス・シム、敬語の補助動詞タマフ・タブ・オハシマス・タテマツル・キコユ・ハベリなどを入れてその用法を述べた。第五節「助動詞」では、指定のナリ・タリ、否定のズ・ザリ、回想のキ・ケリ、完了のツ・ヌ・タリ・リ、推量のム・ジ・マシ・ベシ・マジ・ムズ・ラム・ラシ・メリ・ナリ（伝聞）・ケム・マホシなどの用法を述べた。第六節「助詞」では、格助詞のノ・ガ・ヲ・ニ・ヘ・ト・カラ・ヨリ・ニテ・ニシテ、副助詞のダニ・スラ・サヘ・ノミ・バカリ・マデ・ヅツ・イ（特示強調）、接続助詞バ・トモ・ド・ドモ・ニ・ヲ・デ・テ・ツツその他、係助詞のコソ・ナム・ゾ・ヤ・カ、終助詞のカナ・ガナ・モガナ・シガナ・ナ・カシ・バヤ・ナム、間投助詞ヤ・シ・ヨ・ヲなどの用法について述べた。第七節「文論」では、文の構造、文の倒置、文

の省略などを略述した。総じて、この章は、「日本文法講座」所収「中古の文法」を拡充した観がある。

第四章「語彙」、第一節「総説」では、語彙の性格を決定する原因に、文献の内容による相違と、位相による対立とがあり、位相的対立の根幹は訓読文と和文であること、訓読文の語彙中、和語は表現語彙、漢語は理解語彙であるが、和文の語彙は、和語は勿論漢語も表現語彙に属すること、記録文・法話等の漢語は和文のそれに近いことなどを述べ、語彙論的調査の問題点として六項目（省略）を掲げた。第二節「語彙量の問題」では、その一例として語彙量の問題を取り上げ、幾つかの調査結果を示し、物語・日記・随筆・和歌を比較し、また、和文と慈恩伝古点とを比較して、相互の特徴を明かにしようと試みた。第三節「位相による語彙の相違」では、和文と訓読文との間に対立的に見出される同義語を品詞別に列挙して、訓点特有語の発生原因を考へ、第四節「漢語の諸問題」では、位相を異にする各資料中の漢語の性格を検討し、辞書の漢語にも、経典読解のためのものと文章表現のためのものがあることを述べた。第五節「その他の諸問題」では、社会階級、及び方言による言語の相違があるが、資料不足で明かにしがたいとした。

「補説」は、本文中の問題十項目について説明を補足したもの。「訓点資料番号一覧」は、本書に引用した訓点資料を番号順に列挙したもので、番号はその文献の成立年代を示す。例へば、成実論天長五年点は 828—1 とあるが、828 は天長五年の西暦紀元を、1 は同年代における最初のものであることを意味する。独創的、かつ能率的な整理の仕方といふべきである。索引は、事項索引と語彙索引とからなり、検索に便利である。

以上、本書の大要を紹介した。平安時代の国語全般を扱つたものとしては、すでに国語学会編「国語の歴史、第二篇、中古」（遠藤嘉基博士担当）、土井忠生編「日本語の歴史、平安時代の国語」（中田祝夫博士担当）等があり、本書は殊に後者に学ぶところがあつたやうで、取り上げてゐる項目には一致するものが多いが、両者共に編纂物の一部として書かれ、紙幅の制限を受けてゐるため、省略された項目もあれば、引用例も乏しく、平安時代語全般を記述したものとしては、簡に過ぎる恨みがあつた。しかるに、本書の出現によつて、今や、われわれは、平安時代語全般について、豊富な知識を体系的に得ることができるやうになつた。本書の功績は極めて大きいといはなければならない。更に本書の特徴をいへば、「平安時代の漢文訓読語につきての研究」（以下「語研」といふ）同様、構想が雄大で論述が組織的であること、和漢に亘る尨大な文献の調査によつて得た豊富な材料がこれを支へてゐること、特に漢文訓読資料と訓読語の研究の成果を大幅に取り入れてゐることなどであらう。

最後に、筆者の感じた疑問と希望の若干を付記して、著者の参考に供したい。(1)資料篇二二九頁、本論三四一頁、その内、文字六九頁、音韻一一四頁、文法一三五頁、語彙二三頁といふ配分は、平安時代語全般の記述を意図とした本書として、適切であらうか。本論に比して資料篇が多くを占め、その皺寄せが本論の後半に及び、文字・音韻に比して、文法・語彙が少いといふ結果を招いてはゐないか。例へば、文論は、「中古の文法」のそれと、文章は多少違ふが、内容は殆んど同じである。ところで、資料篇の内、「漢文の世界」が七割を、「訓点の創始」と「訓点の固定」がその六割を占めてゐるが、これらの項目は「語研」には見られない。また、「文字」と

「音韻」も「語研」には欠けてゐる。一方、「文法」は、「語研」では全体の三割を占め、「語彙」は一割に充たないが、他の項目でも随所に語彙論的記述が見られるから、「語彙」は実質的には多くの紙幅を取つてゐるのである。この事実は、「語研」に欠けてゐるものが本書で詳述され、「語研」で詳述されたものが本書で略述されたことを示してはゐないか。「語研」と本書とは、本来異つた意図の下に論述されたはずであるが、著者が同一人であり、著者の本領が漢文訓読資料と訓読語の研究にあるところから、自然相互に関連を持つことになつたのであらう。従つて、われわれは、「語研」と本書を併せ読むことによつて、著者の学問体系を知ることができやうである。(2)宇津保物語から「やまぶきにつけたるはしのひて(ィしのて)はるのじ。あをきしきしにかきて松につけたるはさうにてなつのじ。」を引き、「さう」を草仮名の意味にとられた(二七九頁)が、吉沢博士の「日本書道新講」に「真の手、春の詩。・・・・草にて夏の詩。」と読み、「さう」は真即ち楷書に対する草書としてゐるのに従ふべきではないか。なほ、「さうがな」の古例としては、同じ宇津保物語(菊の宴)に「廻文して奥に草仮名かきつけて遣さば、さはすまはじ。」(大系本二二頁)の例がある。(3)片仮名のンが撥ねる音の象徴としてのVから出たとする説(二九九頁)は、学生時代に吉沢博士の講義で聞いたし、「日本書道新講」にも出てゐる。(4)重点記号「ノ」の発達について若干の例が示されてゐる(三〇〇頁)が、活字印刷では実情を伝へることができない。(5)新撰字鏡に見えるコ・ゴ二類の書き分けを、昌住自らが音韻的に区別したもの(三三五頁)とされたが、新撰字鏡より半世紀も古い訓点資料で区別しないものについては、どう考へればいいのか。春日博士によれば、聖語蔵本金剛般若経賛述嘉祥四年点は、コに「こ」しかなく、「過ュュ」のコ(甲類)にも「こ」を用ゐてゐる。(6)法華経釈文の撥音記号Vを、この種の記号の最古の例とされた(四〇八頁)が、地蔵十輪経元慶点の「孫ソV」「奮迅ッV」を認められないのであらうか。もつとも、他の場所(四一四頁)ではこの例が引いてある。(7)拗音のショウを直音にソウと表記する(四二六頁)のは、単に表記上の問題なのか、発音そのものが拗音から直音に変つたと見るのか。後者とすれば、サ行頭子音はs ʃ ts tʃのどれだつたのか。ʃ tʃであれば、拗音と直音は同音となる。sでないとすればtsといふことになるが、いかゞ。著者も、撥音便・促音便の場合から、サ行頭子音をtsと見たい意向のやうである(三八五頁)。(8)陳述の副詞を否定・禁止・疑問・反語・条件の五類に分けられた(四五〇頁)が、訓読語を加へると、更に当然(マサニ)、願望(ネガハクハ)、比況(タトヘバ)、推量(ケダシ)等が必要であり、イハムヤ(反語でない場合)、ムシロのやうにどれにも入れがたいものもある。(9)中田博士に従つて地蔵十輪経元慶点から「懼(オ)ソラムトセル」を引き、オソルが初期から四段に活用した例とされた(四七一頁)が、この例は今剝落して読みにくい。(10)ウ(得)について、「『・・・ることを得』のやうに必ず『こと』を取り、又、・・・『を』を取らないこともあつた。」アタハズ(不能)について、「『こと』を取る場合と『に』を取る場合があつた。」(四七四頁)とあるが、時代によつて相違し、初期には―コトウとヲを取らないことが多く、―ニアタハズは末期以後の新しい形であることを注意すべきであつた。(11)「中古の文法」で連体修飾格とした「おいらくの来むと言ふなる」を、本書で主格に改められた(四九五頁)のはよいが、「みまく

ほしき君」「み巻のほしければ」「あれまくもをし」などを、「『ほし』『をし』を伴ひ、目的格又は連体修飾格に立つ」（四九六頁）としたのは理解しがたい。時枝文法に従ふ著書としては、対象語格と見るべきではないか。(12)文末終止の―ク、―クノミについて、「本来体言で文を終る喚体句の一形式をなすものであり、『ノミ』はそれを強めるために更に添加された機能を有するものである。」（四九九頁）として、四つの例を挙げられたが、卑見では、前の二例は喚体句で感動を表すが、後の二例は述体句で、限定または指定を表してゐる。拙著「訓点語の研究」で述べておいたが、その後、守屋本妙法蓮華経古点に「此レは是レ化―城にあらク（のみ）〔耳〕」の例があることに気付いた。述体句であればこそ―クノミが「耳・而已」に固着した訓として終助詞的機能を果すやうになるのではないか。(13)「純粋の漢文訓読では、原則として『る』『らる』は受身の用法だけであつて、自発・可能・尊敬等の用法は見られない。」（五〇六頁）とあるが、尊敬と見ざるを得ない例もある。拙著「訓点資料の研究」の書評で著者に認めて頂いたが、他の資料にも古くから散見してゐる。(14)完了の助動詞のリは、「ヌ・ツ両者共に共存しない」（五二六頁）とあるが、小川本願経四分律古点に「宿セリツル」、春日本金光明最勝王経古点に「鍾アタレリツル」の例があり、稀にはツに続くこともあつたらしい。(15)推量の助動詞ムの已然形の例として、中田博士に従ひ地蔵十輪経元慶点から「勿ナカラメヤ」が引かれてゐる（五二九頁）が、今は剝落して読みにくい。(16)拙著に挙げた法華義疏長保四年点の例「其の城七重ありなり」について、「ヨコト点によるものであつて確実ではない」（五四一頁）とあるが、私は、アルナリとあるべきものが、アリ・ナリ二つのヨコト点で示されてゐる事実をいつたのであつて、このナリを伝聞推定とは見てゐない。伝聞推定のナリが初期の訓点資料にも稀に見出されることについては、かつて述べたことがある。(17)格助詞ヨリの特殊な用法について、「『自非・・・』といふ原文をアラザ（ズアル）ルヨリハと訓ずることによつて生じた」（五五五頁）とあるが、拙論に述べたやうに、私は、アラザルヨリハ・アラズアルヨリハと読んだ確実な例を知らない。法華百座法談聞書抄・今昔物語・正法眼蔵等の―ズヨリハ、―ズヨリホカの例に従つて、訓点語の場合もそのまゝ―ズヨリハと読んだ。承接の問題は残るが、ヨリをこのやうな意味に用ゐること自体が無理なのだから、接続が破格であつても、翻訳文法としてこのまま認めざるを得ないのではないか。(18)接続助詞バの項で、初期の訓点資料には、動詞・助動詞の已然形だけで確定の順接を表す場合のあつたことに触れてほしかつた。(19)「訓点資料では、『かな』を除いて他の終助詞の用ゐられた例をみない。」（五六八頁）とあるが、イハムヤ――ヲヤのヲヤの如きは、イハムヤに応ずる一種の終助詞と認めるべきではないか。(20)文論の中に「提示語法」を加へてほしかつた。和文には少ないが、訓読文には多く、両者の位相の相違を文の構造に求めることができるからである。以上、強ひて瑕瑾を求めたが、本書が未曽有の学園紛争の中に成立したことを思へば、著者に対して、畏敬の念を新たにせざるをえない。

―島根大学教授―